



神緑会館、神田知二郎碑の由来（インフォメーション）

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 19:80-83

(Issue Date)

2003-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81007790>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007790>



神緑会館，神田知二郎碑の由来

神緑会館入口近くの右手の石碑については，神戸大学医学部50年史や神戸大学部局史—前身校史に記述があり同様に神戸大学医学部の紹介誌には毎年掲載されている．例えば，50年史では，8ページに「姫路病院長だった神田知二郎(大学東校出身，東大医学部前身)を医学校初代校長とし」の記述とともに，写真集899ページに移設前の広厳寺内に建立されていた写真を掲載している．

2003年3月中旬に「記念碑の件で来客希望がありますがどうしますか？」の問い合わせが医学部事務からあり，3月27日にお会いすることにした．突然の来訪で目的も解らないまま，菅 キエさんと娘さん夫妻に面談した．「神田知二郎の命日は3月28日であり，これまでお参りしていたが，石碑が移設されており，副住職にお聞きしたところ神戸大学に移したと聞いたので訪問した」とのことであった．経過を説明し，「神戸大学医学部の一等地に移していただいて感謝している」とおおかたの理解を得られた後，神緑会館に移動して保存状況などについて説明した(写真1・2)．菅さんの御母君は，神田知二郎先生のお兄さんの娘さんで，子供がいなかったので養女になり，養父の死後，「神戸のお父さん」とよく言っておられたとのことであった．

お手元に保管されていた長澤 亘先生の手になる記念文集のコピーの寄贈を受けたので，感謝しつつお見送りした．その資料を掲載し，諸先生の理解の一助としたい．

故神田先生近影と御略歴(写真3・4)

神田先生の写真として残っているものはこれまでなく，この写真が唯一つと考えられる．建碑の次第と手書きになる記念碑，御略歴がまとめて掲載されている．又，記念碑の文字については，松村先生(36年卒)の努力により，石碑より直接読み取り，文章化されたものがあるが，配列は変更が加えられているようです．

故神田先生10周年追弔会の記

長澤 亘(日記より)

「明治32年4月14日故神田先生の追弔会が神戸奥平野村祥福寺に開く」とあり，記念写真(5)，発起人



写真1 記念碑の前で，菅さんと娘さん夫妻



写真2 神緑会館展示室で



写真3 神田知二郎先生近影と直筆の手紙

16名、来会者64名、送香料者11名、送弔文者13名、送弔電者9名の氏名が記載されている。写真にはほとんどの場合、氏名がかぶっているが、一部しか読むことができない。

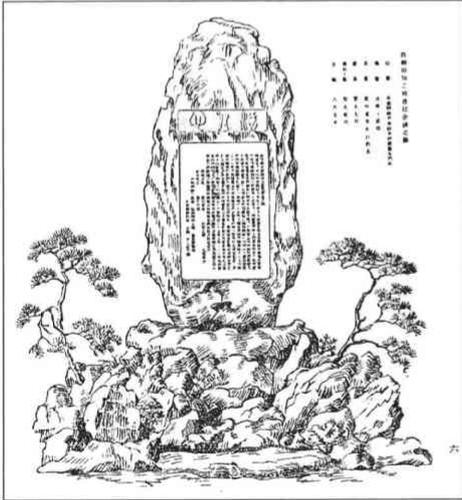


写真4 最初の記念碑。土台が石の寄せ集めであった

建碑の次第

明治二十五年三月廿八日、故舊相計り神戸市楠寺(廣嚴寺)境内に記念碑を建設したるものにして、古記録を左に掲げし以て參考とす。

募料の受取 金五十八圓也 募料境内六坪、明治二十三年五月十日附、神田新作殿宛にて醫王山墓地管理者の受取書あり。

神戸警察へ出願 建碑出願人は、高橋盛孝、長谷基一、伊藤正信の三氏にして、奥印は神戸市長鳴瀬幸恭氏、許可人は神戸警察署長小林伊成氏、許可月日明治二十五年一月九日なり。

活人之心

故醫學士神田知二郎君紀念之碑
明治九年中内務省暫拔大學醫生若干人給學費待其成就地方病院院長職
教授醫學神田知二郎君其一也諸子一時後醫學術才行各有所長及居職皆
能勉勵從事規條詳悉戒約備至今日地方醫道之興實遠端於此而君雖肺炎
尙執職不促遂至於天大年悲夫君諱春翁山城國相樂郡白栢村人家世業醫
考曰退藏姓坂本氏以十二歲喪考十五歲廣瀬元周於伊勢醫學十九入大學
二十七卒業醫學士爲兵庫縣姫路病院院長轉神戸醫學學校校長兼病院長又兼
神戸藥學校校長數爲地方衛生會委員檢疫委員累增俸受賞賜前後數次君之
赴任縣官銳意更張病院創設醫費君與其事規畫得宜就學者無不成之治者
無不疼吏民大悅卒之時齡僅三十六實明治二十二年三月二十八日也歸葬
子白栢村先人之塋城配高階氏無子故舊謀鑄石表後寄書乞余銘君之在大
學也余兼經理大學醫學部後常不絕信事有緣由故不辭也銘曰

時雨之化 世仰其成 回春之像 人保其生
何以致之 萬厚慈明

內務省衛生局長 從四位勳三等 長與專齋撰
兵庫縣姫路市 士族 井上松香書

神田知二郎先生の御略歴

二 二
嶺巖たる笠置の山麓を沿々と流れる木津川の、加茂と云ふ渡船場を渡り、東南に向ひ舊郡信樂に歩を進む
る二里の山間、此處は京都府相樂郡西白栢村。數代醫を業せざる一軒あり、是ぞ恩師神田先生の御生家なり。
父退藏氏は餘程漢書の造詣ありしと云ふ、當時大阪の緒方洪庵先生と同輩にして有名なる京都の廣瀬元恭
先生と知友にて、先生の翻譯を添削せられたることありとて、今尙、理學提要と云ふ古本が同家に保存さる
ゝやに聞く。

神田先生幼少の頃は、隣村の法性寺にて句讀を習ひありしに、拾貳歳の時父退藏氏逝去され、前途の方針
に迷ひ居られしが、義兄者吾と云ふ人に連れられ兵庫に來られ、或家に丁種奉公に使はされ在りしが、省吾
金に窮して、天誅組浪士三上三左衛門と云ふ人へ、人質のやうな形に渡された。然るに浪士其才智を愛し
自己の養子に懇望すべく、遠路遙々生家を訪れ、未亡人の母親に其事を談判せしに、母親驚き且つ怒りて決
然謝絶す、浪士刀を抜き傍らにありし芋を突き差し、是を食べて見よ、と顔前に突つ、母親怒ることな
く、刀尖の芋を嚼む、浪士即ち語して歸れりと傳ふ。

父退藏氏逝去の後、長兄新作氏家業を繼ぎ、醫を業せられたしも、未だ充分の修業を致され居らず爲に弟
知二郎先生に、充分の教育を致さんとの意志ありしが、幸ひ父退藏氏と親交ありし、京都廣瀬元恭先生の時
習堂塾へ明治二年歳十五にて入塾せられたり。

同塾長にして同先生の嗣子元周先生、津の病院長として赴任せらるゝに従ひ行きて醫學を修め居られしも
青雲の志止み難く、意を決して東上せむことを家兄新作氏に計られたるに、新作氏直ちに快諾、家財の山林
田畑を賣却以て學費を得て東都に向はれ、十九才にして大學に入學、廿七才にして東京帝大御卒業即ち明治
拾三年七月、東大正規修業者の第二回にして同期生十七人(濱田玄達、小金井良精、緒方正規、榎柳、伊藤
盛雄、小林廣、伴野秀堅、伊勢錠五郎、杉田雄、長尾精一、石川公一、鈴木孝之助、沼浪貞吉、菅之芳、外
山林助、弘田長の諸先生)中の一人なり。

是より癸明治九年、内務省俊才を抜いて是に學費を支給せらる、先生も又其一人なりき。卒業後直ちに、
衛生局より兵庫縣へ出向を命せられ、公立姫路病院長に任せられた。

院務の革新、地方開業醫の講演等、日もたゞならざりしが、同拾五年公立神戸病院附屬醫學所長を命せら
れしと同時に校位を進め、甲種縣立神戸醫學學校に昇格し、育英を盛にして以て縣立神戸病院院長とされ、醫
務を革新し内科、外科、眼科、産婦人科の分科を置き、病院を改築し大いに醫育治病に盡瘁せられた。

註 先生來臨時神戸病院には原教師ヘレン氏あり、姫路病院には時々テラウ氏、ヘレン氏等の外國人其指導なしたりしも、先生來任
と同時に得解せられたと聞く。即ち英佛蘭米等の醫學が獨に換りし時期。

されば名聲日に揚り、上下官民の信用頗る厚かりしが、生來蒲柳の御体質遂に肺患の爲、諏訪山々麓の假
寓に於て御長逝遊ばさる。時に歲三拾六、明治廿二年三月廿八日であつた。眞に惜しき人であつた。
遺骸は郷里菩提寺に葬られしが、御遺齒は神戸市楠寺境内、記念碑の下に永久に護納せられてある。嗚呼！



写真5 10周年記念撮影（神戸市奥平野祥福寺に於て）

移転改修の次第（16P～22P）

昭和12年5月18日楠寺総代山田平三郎氏が来訪され、神田先生記念碑の移転改修を請求される。その理由は本碑の基礎薄弱のためか先年傾斜して、寺方より多大の費用をもって修理されしが、再び少し傾斜するに至った。この度、同寺の宝物殿を同所に建設するにつき是非共移転を要する事となりしも、建設当時の書類もなく困却し、市内開業医諸氏が寄付を募って基費用にあてる計画であったが、ふと小生（長澤 亘氏）が非常に縁故のある者であると聞き相談にこられた。

しかし建設当時は長澤氏は東京在学中で、僭越に思い、2、3の先輩に問い合わせたが、建設当時の費用等もはっきりせず、諸氏の承諾をえて、「報恩の為、万事引き受けた」と記入されている。「本碑中に有りし小壇中の御遺齒は、工事中本堂にお祭りせしも是を更に土瓶に納め、基礎の混凝土中に手厚く葬れり」とあり、写真7では、左横に「改修中の御遺骨奉祀」と記載されている。移転改修除幕式は、昭和12年6月21日に楠寺住職千葉猷山氏他四ヶ寺の住職諸氏によって厳かに式典を挙行、関係者多数参列せり。

五十周忌法要（写真6 改修後の碑）

計らずも御逝去後49年に該当せるを以て除幕式に引き続き五十周年亡御法要を営むこととせり。同窓及び関係者約五十名の御来集を願ひ、追悼の辞（長澤 亘氏）及び井上学太郎、中野 磧、河本後進氏等の感想追懐談ありて式典を滞りなく終了した。

「県立神戸病院がその後二度の改築により、現在では宏大美麗しかも設備万端行き届きたる大病院となりました」と追悼の辞を述べられている。



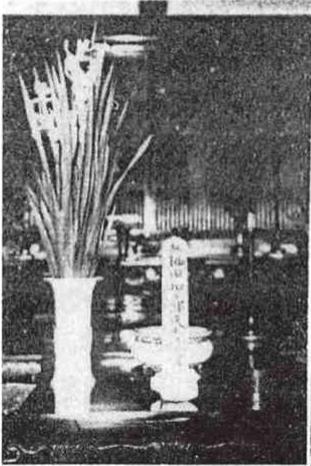
写真6 改修後の記念碑

記念文集は、昭和12年 7月21日印刷
 昭和12年 7月26日発行
 著者 長澤 亘

ている。同所は県庁の少し東側で、その後日本赤十字血液センターとなり、戦争にて空襲にあったと39年卒下奥 仁先生の記憶で述べられている場所に相当する。

神戸市神戸区下山手通五丁目長澤小児病院と書かれ

(編集委員会)



改修中ノ御遺骨奉祀



写真7 移転改修除幕式

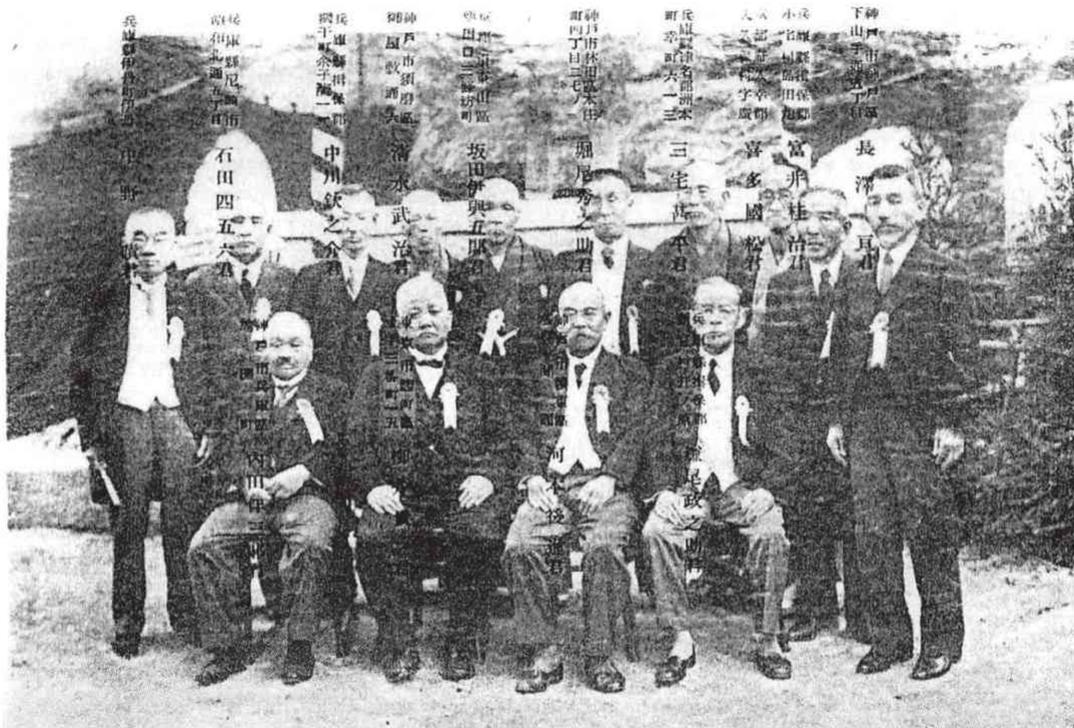


写真8 旧同窓生記念写真 右端 長澤 亘先生